

本場ローマでオペラ指揮



8月に「道化師」

その言葉は耳にしても、本物に触れたことがある日本人は少ないといわれる「オペラ」。演じる歌手の声と、オーケストラの生演奏が神髄だが、本場イタリアのローマ歌劇場が催す夏の公演の指揮者に、船橋市出身の吉田裕史さん(38)が抜擢された。日本人では初めて。小学から高校まで地元公立校で音楽に熱中した吉田さんは「もっと気軽にオペラを」と話し、同市制70周年記念事業として7月1日に同市である「ミニオペラ」でも指揮棒を振る。

(桂植次郎)

5月30日、市川市文化会館。時間を気にするスタッフを尻目に、吉田さんが楽屋に現れた。開演20分前だった。

「タクシーに乗るより、確実にと思っ歩いて来ませしたよ」
近くの複合商業施設でマッサージを受けていた。携

船橋出身 吉田さん

携帯電話で連絡はとっていたが、スタッフからは「マエストロ(指揮者)、根っからのイタリア人だねえ」と笑い声がとんだ。公演では満場の拍手を受けた。

5年前からローマに住む。今年にはルーミアニアに招かれ、今月はカイロ、11月はソウル、と世界各地を飛び回る。

それでも、「とてつもなく大きなチャレンジ」(吉田さん)となるのが古代ローマの史跡で世界遺産でもある「カラカラ浴場」で8月8日から5回にわたって催されるオペラ「道化師」(ローマ歌劇場主催、レオンカバッロ作)だ。
「サッカーならセリエA。日本人初の舞台で、武

音楽について語る吉田裕史さん=5月30日、市川市大和田1丁目の市文化会館で

日本人初の抜擢に「武者震い」

者震いします」と吉田さん。起用は同歌劇場のエルナーニ総裁の指名だったという。

初めて指揮に立ったのは船橋市立法田中学の時だった。

法典小で器楽クラブ、同中でも吹奏楽部でトランペットを吹いていた。ある日、顧問の大槻秀一教諭(50)に現在、県教委指導課から下級生の指導役を命じられた。

82年ごろ。部員約130人の大所帯だった。指揮者として、「せーのっ」と合図を送るぐらいからの始まりだった。

「後輩の面倒見がよかったです。指揮も卒業時にはかなりできた。でも、ここまで成長するとはねえ」と大槻さんは驚く。

県立国府台高校でも音楽一色。人生を変える出来事が訪れたのは、2年生の冬のことだった。

仲間が親のついでで入したポストン交響楽団日本公演のチケット。それを手に

東京のNHKホールに出かけた。プラームスの交響曲第一番で感じたのは指揮と演奏、聴衆の一体感。終演後、規制のロープをくぐって楽屋に入り、座っていた指揮者小澤征爾氏に思わず、口走った。

「指揮者になりたいんです」

約30秒の沈黙の後、初対面の小澤氏は言った。

「本気、みたいだね。日本では教えてないんだ。タングルウッドにいらしゃい」

タングルウッドはポストンに近い同楽団の拠点。小澤氏はパーシステイン作曲のシンフォニックダンス(ウエストサイド物語)の楽譜にサインをし、渡してくれた。

その後、吉田さんは東京音大指揮科に進学。教官でソプラノ歌手の東敦子さん(00年12月死去)との出会いをへて、歌手と演奏の間で舞台を操るオペラ指揮を志す。

卒業後は、声楽家団体

「二期会」でオペラの基本を学び、文化庁や民間の奨学制度を受け、99年からドイツ、02年にはアルプスを越えてイタリアへと移った。

日本滞在は年に計3カ月ほどだが、地元とのつながりは保ち、船橋市交響吹奏楽団(団長は弟・吉田康彦氏)で指揮をし、市川オペラ振興会理事も務める。

7月1日のミニオペラは船橋市民文化創造館で催される。演目はカラカラ浴場と同じ「道化師」(三浦安浩演出)。イタリアの旅回り一座の物語だ。午後2時と午後5時の2回公演で先着200人が無料で入場できる。

「オペラって難しそうですが、全然そんなことありません。一流歌手の圧倒的に美しい声。理屈抜きで感動しますよ」

今後の予定などは吉田さんの公式ブログ(<http://yoshidablog.xsrv.jp/blog/>)へ。

来月地元でも「ミニオペラ」先着2000人無料招待